Meeting 派遣，第５回育志賞受賞，第65回リンダウ・ノーベル賞受賞者会議派遣等，様々な国際学術プログラムやアワードに参加させて頂き，最終的に歯科医師として研究職を選択するに至った。発表者の場合は，SCRP がきっかけで現在があると言っても過言ではなく，進路選択の大きな決定因子となった。

本発表によって，特に学生の皆さんに SCRP がより周知され，少しでも有益なものとなってもらえれば幸いである。

### 10）知的障がい者にユマニチュードを用いて口腔ケアを実施した１例

○泉田玉磨美[1]，入澤　正晃[2]，鈴木　海路[2]，福島　和美[2]
山家　尚仁[2]，北條健太郎[2]，小松　泰典[3]，渡邉　崇[2]
鈴木　史彦[2]，清野　晃孝[2,3]，佐々木重夫[2]，杉田　俊博[2,3]
（奥羽大・歯・附属病院・看護科[1]，
奥羽大・歯・附属病院・地域医療支援歯科[2]，
奥羽大・大学院・総合診療歯科[3]）

【緒　言】高齢者施設に入所し，知的障がいを伴っている患者の歯科治療では，高齢者歯科と障がい者歯科の両方の要素を考慮する必要がある。心身の機能が低下し他者に依存せざるを得ない状況になっても「人間らしい」存在であり続けることを支える「ユマニチュード」は，哲学とその実践技術から成るケアメソッドである。

今回我々は「ユマニチュード」を用いて介護老人ホームに入所する知的障がい者の口腔ケアを経験したので報告した。

【対象・方法】特別養護老人ホームに入所している57歳の女性。４歳時に日本脳炎を発症したことから知的障がいを併発した。54歳時に脳梗塞を発症し57歳で現施設へ入所。長期間に渡り歯科受診経験がないことと，軽度の拒否を認めるために家族，施設スタッフから口腔ケアの依頼を受けた。多量の歯石沈着を認めたため全顎的な除石は全身麻酔下の治療を勧めたが，家族は施設内のみでの治療を希望された。そこで我々はユマニチュード技法を用い，信頼関係の構築から始め徐々に除石を試みた。

【結　果】ユマニチュードは２人のフランス人，イヴ･ジネシスとロゼット･マレスコッティによって作りだされた包括的コミュニケーションに基づいたケアの技法で４つの柱から成る。その４つの柱である「見る」「話す」「触れる」「立つ」のうち「立つ」以外の３つを用いたところ，次第に治療も可能になり，現在では除石を終了しブラッシングまで可能となった。

【考　察】今回の治療にあたり我々はユマニチュードを用いるのと同時に，一度築きあげた信頼関係を崩さないように注意した。その理由として我々は施設にいるスタッフのように毎日顔を合わせられず，多くても週１回しか機会がないためである。相手が話しているときは傾聴に専念し，また拒否を認めた際には話し合いながら無理に治療を続けないなど慎重に実施したことが現在に繋がったと考える。また，ユマニチュードは主に認知症の方に用いられる技法であるが，今回の症例のように認知症ではない知的障がい者への治療にも有効であることが示された。

【結　語】今後，高齢者施設には知的障がいを伴った患者の増加が予測される。また，知的障がいのみならず，高齢者特有の疾患を伴っていることが考えられる。その対応にマニュアルはなく，その人それぞれに合わせた対応が必要となることが示唆された。